光

第五十七輯

大正十五年九月

◆一燈園生活について(二)……西田天香
◆白夢香洞語錄……金子白夢
◆斷想……八田勝三
◆昔の日記……みのる生

同人 懺悔報恩の奉仕者
祈願 不二の光明によれる生活
費用 供養されたる淨財

◆炬火を翳して……貞安操
◆一枚のお札……三上和志
◆亡者……松下吉衛
◆鹿ケ谷より……にえ生

一燈園・宣光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆倶成就大圓覺

別願　將來世界眞平和

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脫るゝことを得べき。願くは常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の清規に隨ひ世諦を成ぜむ。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生産業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至淸規戒行も、此の見地よりすれば即ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは、個中の消息もとより言辭の勞し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して倘自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその淸規を守ることによりて許さる。天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絕し、以て齊家治國平天下を期するにあり。天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

一燈園生活について（二）

西田天香

二、懺悔

私が、他所へ行つて、常に感ずることのひとつですが、園の同人の方に逢ふ時間が尠なく、かへつて、他の方の爲に時間を使ふことが多いのです。折角、待つてゐてくれる同人の方に、話する暇もない時、淋しいだろう、濟まない事だとおもひます。一生懸命托鉢して、待ち焦れて貰ひながら、短い時間に、それから〳〵、人から人へと、問題に移り、殘り惜しい氣持で別れる。而し、夫れかとて、逢ふて何か話を聞かうとしても、また夫れほどの話もない、謂はば、顏見ただけでよいと云ふやうな事になるのであります。

右から左から上から下から細かく此道の理を究めやうとする方がある。それも良い事ではあるが、なか〳〵中心は押へられないものです、ぐる〳〵廻りをする許りで、表面を探り廻してゐる感じがします。托鉢する人だけが、自然に、惠まれるのか、言葉が尠なくても、どこかに合點してゐるやうに見えます。私は忙がしい忙しいで、其人の一身上にも、道の上にも、あまり話はしないのですが、眞面目に托鉢してゐる人は、何處かで、知らず識らず、體得して行かれます。行つてゐれば、解るのだ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

な、と、それは永い間の經驗上の確信であります。

一年の人は、一年だけ、二年の人は、二年だけ、五年は、五年だけの事があつて、又同じ年輩の方は、また同じやうな事を云はれる、智慧や、分別でなく、中から湧き出た實感體驗である、行つて見ねば解らぬのであります。

坐禪を敎へられ、講座を聞くに、初めは或る程度までしか受け入れられず、何年かの後には、同じ老師の言葉を、また意味深く味はれ、それは坐る程、解つてゆきます。念佛稱へとなへした人は、念佛の中から、生きたものが表れて來る。

靜座の人は、坐つて見なさい、

托鉢の人は、行つて見なさい、

である。

私の話は、托鉢の人だけに解るので、行わない人には解らんかもしれませんが、言葉尻に、引懸らないで、御めいめいの、深さだけに聞いて頂く。

托鉢の中には、色々の意味が含まれてありますが、大體三ッに分けますと、

懺悔

感謝

奉仕

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

であります。

懺悔は、濟まなんだ、といふこと、同時に、これから致します、といふことであります。

感謝は、色々の方便で導かれて、有難う御坐います。すると感謝だけでは勿體ない、そこに奉仕が産れるのであります。

托鉢は、この三ッであります。

今晩は懺悔に付て話します。

私は色々の問題を聞かされます。堪えられぬやうに云はれる人があります、又堪えられぬのでありませう。夫婦仲が惡いとか、金が無いとか、了解せられぬとか、周圍に愛の心持を滿遍に分けられぬとか、いろ〳〵、困つた問題であります。こんがらかつては、どうしたらよいやら解らなくなります。

昨日も、或實業家が、失敗して、其の色々跡の困難の話をしていつた。大きな家の破産は、周圍にかもす混雜も大きい、責任者は、苦しむ事でせう。

どんな問題でも、スパッと切れる方法はないか、どんな病でも、治る藥はないか、と考へると、ただ懺悔といふことで、みんな切れて了ふと思ひます。惡かつた、といふ自覺で救はれる。口で云ふ許りでない、頭を下る許りでない、一切の事に、懺悔を貫かねばなりません。

開山方が、

我昔所造諸惡業　皆由無始貪瞋痴　從身口意之所生　一切我今皆懺悔

と云はれてあります。自分の頭から、足の先きまで、心を貫いた懺悔なら、どんな問題でも切れるの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

です。懺悔しても、世の中の平和が來るものか、といふやうなは、懺悔が足らぬからであります。貧弱に見えても、懺悔が出來れば、申譯は立つ。凡そ如何なる事でも、此懺悔によつて、斷ち切れると思ふ時、私の頭は安まります。

女房を殘して來た人、亭主を置いて來た人、内で絡らんでいては、いよ〳〵出る道が解らなくなつて、背水の陣を布いて見る。托鉢先きでは、そんな、事情ともしらず、お掃除を、洗濯を、或は勝手のお手傳ひを賴まれ、或る時はまた落伍者のやうに云はれながらも、ハイハイとしてゐる、お金も貰はねば、何にも貰はないで、苦しいことを祈りながら、目をつぶつてゐても、了解されず、辛いこともあらふ。

私も自分で行つて來た、人知れず泣く事もある、然しまた勿體ない程同情され、却つて德を亡しはしないかと、思はれるやうな事もある、が、前にも後にも、强敵を受ける氣持の時もある。見すぼらしい身なりで、尻切れ草履で歸る時、ホロリとする事もあるが、けれども、此生涯は光榮であると思ふ。生活自身が、申す通り、懺悔の實體を表してゐるからであります。

自分を投げ出した、それ以上の懺悔は無い。托鉢に行く人の親は、良い娘、良い息、とよろこばねばならぬ。全體への奉仕に、身を投げて行く、身勝手をしない、素直な心、しなやかな體とを一ッにして、ほんとに托鉢したら、現在どうであらうと、災の根は切れて、初めて救はれるのであります。同時に、周圍のもつれがほどけて、大事業にもなるのであります。誰か、一人死ねば、それだけの破紋が、周圍に傳はるのです。

此處で、この生活もよいが、その氣持で、家へ歸つて托鉢したらとも云ふ事ですが、それでは、あらゆる行き詰りは、切れはせぬ、惡いことではないが。

私等のすまゐは、一切なのである、一たんそうして切つた後には、因緣の家へ歸り、其處の仕事をするもよい。そこで自分の家ぢや、と執着してゐると、生活が懺悔にはならぬ、物特つても、惡くないと云ふ氣持で持つのは、自己の執着と妥協するので、持たないといふ生活を、確かり握つて置かねばならぬ。そこまでやる事を、世間の人は、やり過ぎだと云ひます。やり過ぎだと思ふほどの事を、一度は、やつて置かねばなりません。自分の物でないと、明瞭知つて、次の時間から、佛樣の物を預かつたと、思ふたら、前の時分より謙遜に變る筈であります。

この心、この身、このくらし、と三ツ並べて、其上に一ツの〇を書き添える、〇はお光であります。これは光の心、光の身、光のくらし、といふことであります。暮らしとは、光を生活化する、托鉢は、生活を光化する道程であります。

園の人は、何かの形で、この道程を、通らねばなりませぬ。濟みませぬ、とお詫びの態度で手前の物と思はず、全部を捧げて、物質的にも、精神的にも、占領する氣持を整理するのが、懺悔の暮らしになるのであります。

一燈園は光の暮らし、といふ事に深く注意するのであります。

心を整え身を整える事は、どの宗旨にもよく說いてありますが、暮らしを、宗敎化する事は、仲々容易に說かぬのであります。又說いたら、宗敎家自身がやらねばならぬ、聞く者も、またそこまでは

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

聽かぬものです。それ故に園は、氣狂ひよばはりされたものであります。

どんな問題を持つて來ても、自分が懺悔の心、懺悔の身、懺悔のくらし、を實行して、私と一緒にやりませうと云へば、皆救はれます。有難い、榮光である、貧しい態でゐても、一切を、扱ふものを持つてゐるのは、有難いと云はねばなりません。

身貧にして、道貧ならず、といふことがあります。

昨年、奉天で或る實業家に逢つた。營口に居た人で『私は營口で大變損をしました。その時、債權者の前に、有るだけのものを皆渡しました、お蔭で同情はされましたが、一人の債權者だけが、どうしても、許しません。家内は私を信じない程にまでなり、家賃も拂へぬといふ始末に、友達から無家賃で借りてゐます、番頭の給料も拂えぬ。も一度、盛り返そうとしても、債權者が、承知せねば、どうする事もならぬ苦しさ、一燈園の生活から行けば、これを如何に、扱ひませうか。』私は、實際問題をきくのが好きであります。いざ命がけの話は嬉しい、眞劍勝負ですから、きいてゐても引き締る、私はその人に言ひました『何でもない、今から此生活をして、持つてゐるもの皆債權者にお渡しなさい。』其人の云ふに『イエ私は何にも持つてゐません、實は、今晩あなた方に、お着せする、布團も、借りものです。』それで私がまた云ひました『でもまだ大きなものを持つてゐなさる、あなたのからだをお渡しなさい。』机の上の研究なら、そうでしたか、と云つて別れもするが、其人今は是非、道を切り開かねばならぬ、すると其人は、見る見る唇の色が、青ざめて、恐ろしく沈んだ聲で『妻子は、どうするのですか。』私はにべもなく云つた『それは、贅澤だ、手前打死する時、妻子も共に行くか、自分の誠

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

だけ先へ貰くのです。』其人は翌日債權者のところへ行き、かねて番頭を渡せと云はれてゐたのを、番頭は給料が要りますから、私なら何にも要りませぬ、どうぞこの體をお使ひ下さいませ、と云ふて出られました。今度は債權者の方から驚いて、妻子はどうなるのかと、きかれ、それで昨日天香師から叱られましたと話したそうで、それまで投げ出したら、債權者も了解せられたそうで、翌日返事があつて、『よろしい心配するな、君への債權を思ふまい、若し商賣するなら、も一度金を貸そう。』と云ふて來ました。前のやり方なら、そこまで了解せられる筈がなかつた。ひとつの出様で至誠が通じてガラリと變られました。その人は、二度その金を借りるうつけものではなかつた。今まで着てゐたセルの着物を筒袖にして、女學校の廊下を拭いた。ホロ〳〵泣けた。『變つた世界があるものだ、これならキット許される』と思ひながら、娘の行つてゐた學校の靴ぬぐひを、掃除する。行つた事のない托鉢をして、自分の身を十字架に乘せる時、一ツの光が輝く。救はれるとは、懺悔が、生活に突き徹る事であります。

今年またその人に逢ひました。運命の變り樣は激しい。今度は前の債權者は逆境に立つやうになつてゐました。その人は前の債權者に、內へ來て一緒に喰べませうと、云ふたことをその債權者は非常によろこんでゐました。昨年十二月には、行き詰り切つてゐた人が、身を渡して、策略でない、權謀でない時、少しの障りも殘さなかつた。半期たたぬうちに、今度は債權者が、悲境に陷り、あべこべに債務者に、救はれました。そうした人達の今迄の生活狀態を調べてみるに、いたづらな、經費倒れであつたのです。今迄は、月に千三百圓ばかり入りましたが今は百圓でよいとの事。妻子も、どうも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

しないで共にゐられます。

一ッの懺悔を貫くとき、凡ては割り切れるとの確信を持つ事が出來ます。其生活の懺悔を、今あなた方が行つてゐられる。

後からは、問題を背負ひ、前には托鉢の誤解も受ける。どんな場合も了解して欲しいと思はいでもよい、時くればきつとほどける、ほどかうとせいでもよい、只ぢつと行つてゐればよい、了解せないのは、そこの家が業が深いからでもある。徹根、體を捧げて貫くやうに、この一つを貫けば、人が知らいでもよい、掃きながらでも、洗濯しながらでも、今日一日懺悔さして貰ふたことを喜ぶ。親の云ふやうに、兄弟の云ふやうにしても、世の行き詰りは切れぬ。懺悔を生活にまで貫く事であります。親の云ふは〳〵した氣持で行つてゐるなら、親不孝でもある、たまに私から早う國の家に歸りなされと云ふても、此生活まで來ねばならぬ理由あつて來たからは、どこまでも行りなさる、物知り顏な、思想的に調べる人で、よく私は托鉢してやつてゐるといふ態度に出る。これでは先樣にも困られる、どうかすると、一日の米の價だけが働けぬかもしれぬ。愚直でよい、なまなか、思想家や、智識のある人によくこんな間違ひがありがちです。

夢窓國師が云はれてあります。

我有三等弟子所謂猛烈放下諸緣專一究明已事是爲上等修行不純雜駁好學謂之中等自昧已靈光輝只嗜佛祖涎唾此名下等如其醉心於外書立業於文筆者此是剃頭俗人也

文筆智識で立つ人を、弟子の中に加へずと、默々と行く人を第一の弟子と云ふてゐられます。實に無量の味ひがある。賢振りせぬやう、わかつた顏せぬやう、隅で小さくなつて、下駄を直す樣、眞面目な人の德を、賢振つた人がこはしてくるのです。人の事ではない、みな私の事であります。愼みたいとおもふことであります。（大正一五、七、一九、於一燈園天香師講話筆記）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

白夢香洞語錄

金子白夢

はしがき

西田保太郎兄
昨年八月「光」に對して年二回寄稿することを約束しておきながら未だに其の債務を果たすことの能きなかつた事を御許し下さい。茲に自分の感想語をごた〳〵と並べて見ました。若しや「光」の紙面を汚しはせぬかと恐れてゐます。併しながら唯だ此の感想語は私自らの自證語であること丈けを茲に明かにしておきます。
九月二日

◇

言葉は凡て限定を有つて居る。或ることを立言することは或ることを否定することになる。言葉は言葉によつて妨げらる。かるが故に言葉によつて發想すると云ふことはそれ自らが自殺的態度だ。言葉のない所にのみ、言葉の使命が盡きてゐる。不立文字ほど言葉の使命を盡くしたものはない。

◇

不立文字とは一一の文字を言ふのだ。言端語端其の一つ〳〵が光となつて流れて居るところに體達した人の心境がほの見えて居る。言葉の盡きたところにのみ本當の言葉が出て來るのだ。

◇

「形」と云ふものほど不思議なものはない。形は何を語つて居るのだらう。木の葉の形、花の形、果實の姿、星の姿、凡ては不思議だ。實在

が自己を限定したものが「形」ではなからうか。否、實在自らのなかに「根源形式(ウーアフォルム)」とでも云ふべきものがあつたのではなからうか。宇宙の根本理念としてのイデーがそれではなからうか。絶對主觀の本具の規範活動即ち絶對意志の活動が純動としてそこに其の相を實現したところに「形」が出來たのではあるまいか。換言すれば神の自己活動は自己自啓の道として必然的に「形」を取らねばならなかつたのではあるまいか。

◇

私はあらゆる「形」のなかに「生」の力の發展を見るのだ。形相のあるところにのみ生が如實に其の姿を現はすのではあるまいか。自然界然り、歷史の世界も然うではあるまいか。

◇

歷史の世界は宇宙の根本形式が「形態(ゲスタルト)」として自己を顯現したものではないか。偉人は神の自啓であり、一切の人は偉人たり得る形態性を有つて居るのであらう。宇宙は、然り人生も、その一切が神自らが自己の生命を形態化しやうと試みつゝあるステージではないか。

◇

「形」のなかには線の音樂が匂ふて居る。色彩の感情が流れて居る。線も色も「形」の自己發展の一面相ではないか。

◇

神とは「形」に現はれざる内なる「形」であり、「形」に現はれて居る秘められた「形」ではないか。

◇

「圓」のなかに一切は統一づけられて居る。圓は一切の始であり終である。圓は「生命」の自展であり其の終極である。一切の理想、其の最高理念は「圓」である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

◇

「圓」のなかに一切は内藏されて居る。無限定は實在其の儘の姿は「圓」でなくてはならない。あらゆる形相は「圓」から出發して再び「圓」に復歸するのである。

◇

「無一物中無盡藏、有レ花有レ月有二樓臺一」。これが「圓」の虚明性と充實性とを最もよく語つた言葉である。（天香兄がいつもよく此の語を愛誦し、能く人に書いて呉れる。私も其の一枚を貰つて秘藏して居る）私は一切は此の「圓」で盡きて居ると思ふ。

◇

圓融三諦の哲理も要するに此の「圓」の説明にしか過ぎない。説明は概念だ。我々は此の「圓」を具體的に把握しなくてはならない。眞人とは「圓」の把握人を云ふのだ。

◇

我々は單に一圓相を畫するだけではいけない。一圓相の中に坐しなくてはならない。單に坐するのみでは駄目だ。一圓相それ自らに對して拜しなくてはならない。否、畫くも、坐するも、拜するも三者各々別々に離れ〳〵になつてはならぬ。三者は渾一だ。渾一のあるところにのみ生きた一圓相があるのだ。

◇

無縫塔。そこに本物がある。分裂は死の世界だ。總和や綜合も未だ本物ではない。主客未剖の心境。未剖と云ふべき主客もない、對立以前の世界。絶對一が如實に自在自現して居るところ。そこに眞の物があるのだ。

◇

「現在」。生きた現在の外に過去もない未來もない。過去、現在、未來の對立關係に於ける現在は死んだ現在であり、抽象的な概念である。そ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

こには生命はない。生きた現在のみが實在自らである。

◇

意識のあるところに道德がある。意識そのものが道德である。道德のあるところにのみ實在がある。道德は實在が意識によつて自己を顯現したものだ。

◇

宗教と名のつくものは本當の宗教ではない。名は物を限定づけ制限づけて居る。名の名とすべきは本來の名ではない。本來のものには名がない。宗教は「本來」それ自體だ。かるが故に宗教には名がない。

◇

キリストが「神」を呼ぶに名を以てしなかつたところに意味深いものがあると思ふ。彼は神を呼ぶに「父」を以てした。「父」は名ではない。

最高生命の象徵化だ。

◇

「父よ」と呼ぶ一念。宗教の一切はその外に何物もないのだ。「父」のなかに一切が內在して居り、充實して居り、汎濫して居り、自現して居る。

◇

「祈る」とは歌ふことだ。神と交るとは神と共に歌ふことだ。神は宴會に於てのみ自らの姿を見せる。

◇

宗教生活とは神の宴會の席に入つて歌ひ舞ひ樂むことだ。こゝでは樂むことそのことが働くことだ。神と偕に生くることだ。

◇

神と偕に生くることを外にして人生はない。神と偕に樂み、神と偕に働く。それが神と偕に生くることだ。そこには凡てが神らしくなつて

居る。人が神らしくなつたときに、人が人らしくなつたのだ。神らしさの外に人らしさはない。

◇

遊戯三昧はその儘活動三昧である。勞働は此の意味に於て遊戯三昧の心境でなくてはならない。勞働が苦痛である間は何處にか無理があり人爲が働き不自然な處があるに相違ない。

◇

遊ぶ、働く、倶にそれは光に泳ぐことである。光を泳ぐ。それが生活だ。それが宗敎だ。

◇

「在る」ことを外にして「可き」ことがあるのではない。事實が單なる自然的本能的生理的心理的な事實である間は本當の事實ではない。價値が單なる論理的な、あるべき所の理想價値である間は本當の價値ではない。本來一なる兩者を二元的に對立して考へるのが間違だ。自然だの文化だのと區別づけて、一方は沒價値である一方は有價値だと見る所に本當のものは死んで居る。

◇

本當のものは自然卽文化であり、存在卽價値でなくてはならない。否、自然の文化の、存在の價値のと名づけた所に實在の抽象化がある。本年のものは名づくべきものでもなく區別づけらるべきものでもない。一切が一である。渾然一如の當體は物と云つても中らず、心と云つても中らず、況んや自然と云ふも文化と云ふも其の當を得たものではない。存在と云ひ價値と云ふ、これ皆學徒の研究上の便利な經濟法に過ぎない。「本來相」自らは決してさうしたものではないのだ。

◇

本來相自らは決して「さうしたものではない」と限定づくべきものでもない。否定も肯定も不可能なものだ。不可能と云ふも不可能。已むを

得ず默する外に道がない。

◇

「默」が一切を語る。然し單なる默は全く無意義だ。「默」が生きて居なくてはならない。「默」のなかに脈搏つて居る「實在の相」。それが本當のものだ。古聖が摑んだのもそれだ。我々の摑もうとするのもそれだ。

◇

「それ」が「それ」である間はまだ本物でない。「それ」が「これ」になるとき。生命が具體化するとき、「生活」のなかに眞の自己を見出したとき、そこに「光」があり、「神」がそこに歩みを始めて居る。

◇

「神が歩む！」。一切はその時を待つて居る。「御靈の初の實を有つ我等」も「自ら心のうちに嘆きて」その時の至るのを「待つ」て居るのだ。

◇

「待つ」。否、もう既に來て居るのだ。否、いつも來通しだ。今だ。「今」の外に神もない宇宙もない我もないのだ。「今すでに來れり。而して聞く人は活くべし。」

◇

「聞く者は活く」。然うだ。神の聲を聞く者のみが活くるのだ。理性の聲ではない。勿論肉の聲ではない。然り、神の聲だ。神の聲を聞くもののみが活くるのだ。

◇

神の聲。それが其の儘眞の自己の聲である。全我の聲だ。我が我に生きた聲だ。神の聲を外にして我の聲のあり樣がない。「それ」が「これ」となつたとき、そこに完成の期がある。人格の完成はやがて歷史の終結を意味する。

◇

歷史は一切人の人格完成のため、然り全人類救濟のために創造された神の自己出現のステージに過ぎない。そこに「圓舞の曲」が演ぜられてゐる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

斷想

八田勝三

未來に希望を持ちすぎても失望するかも知れない。それはこれから展開してゆくものだから未知の世界なる興味はあるが、矢張り喜びと悲みとが交錯して來ることだけは間違ひない。然も私達は何時も自分に都合の好い事だけに望みをかけて、次の頁を繰つて居る。そして豫想しないことが起ると、不合理極まるやうに感じて、悲觀したり、呪つてみたり、當り散らしたりして、再び骰子を拾つて居るやうな氣がする。

□

料理人になるには、先づ鍋を洗ふことから始めるのだそうで、前に煮たもの丶味が殘つてゐては、折角苦心してだした風味も、純粹にそのものとして食膳に上せないからだと、聞かせて貰へば、成程と合點するが、その道〳〵に、人知れぬ修業がいるものだと、しみ〴〵思ふ。

□

一家の中に病人のあることは、人々の心を暗くするが、一方お互がしんみりと一つにならうとする有難い感情も、同時に湧いて來る。向ふ見ずに歩いてゐた者も、思はず足下に眼を向けさせられる。寢てゐるものはねてゐるものとして、看護してゐるものは看護してゐる立場から、その時丁度到達してゐる自分の位置を、否應な

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

しに審議させられる。理智的に持ち合せてゐると思つてゐたものと、直面した自分の姿との差を、自分だけにははつきりと見せつけられる。それは他人には如何見えやうとも、自分だけは誤魔化せないものである。苦しい試練ではあるが、人間が人間としての分を知らせて貰ふには一番好都合の機會だと思ふ。

□

都會に住んでゐると、花電燈の光りに眩惑せられて、美くしい月の出て居るのを知らずに過ごす宵もある。又折角出てゐても、建物に妨げられて、天心にかゝるまでは分らないことも多い。だから

『のゝさまいくつ……』

と幼子に唄つてきかせるにしても、せめて橋の上へでも出掛けないと、適はしい情趣も湧いて來ない。又涼み臺に寢ころんで、流星の數をかぞえつこする遊びなどは、だん〱出來なくなつて了つた。蒼空の神秘を味ふには、周圍が餘りに目まぐるしすぎるのだ。これは智慧の世界に課せられた一つの負債である。

□

『何卒大空を見入る餘裕を持つて下さい。』

敬愛する皆さまに心から此の言葉を贈る。

□

橋の下を覗くと、ごつさり小魚が泳いでゐた。瞬間腦裏を掠めたものは

『これは投網をうてばうんととれるなア』

との思ひ。魚の方から云へば怖るべき危險思想である。これぢや自他一體感もあつたものぢやない。

『おゝ可愛い』

と無心に群れ泳ぐのを、その儘邪念なしに喜べるやうに、何時の日なれることだらう。

□

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

太平洋上の怒濤がなつかしい。波長三町のうねりにもう一度搖られたい。人力が全然役にたたない大荒化の眞中に、私の心の眼はひらいた。みし／＼と船のしわる音も、スクリユーの空廻りする陰慘なひゞきも打ち忘れて、天地と一枚になつた瞬間！　そこには唯感情の恍惚境が空間に擴つて行つた。太平洋上の怒濤がなつかしい。波長三町のうねりにもう一度搖られたい。

□

寢呆面で雨戸をくつてゐると、涼しそうな水音が聞えて來る。ふとみれば川向ふのお風呂さんの捨て水だ。それが丁度今働き始めた計りの聽覺に適はしい位にひゞいて來て、和やかな音の世界へ導いてくれる。色んな不淨を洗ひ落した後、まだこのやうな好い役目までしてくれてゐたのを、今朝まで知らなかつた。

一枚起請

唐土我朝の諸の智者達の沙汰し申さるる觀念の念にもあらず又學問をして念の心を悟りて申す念佛にもあらずただ往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申して疑なく往生するぞと思ひ取て申す外には別の子細候はずただし三心四修なんど申す事の候は皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞとおもふうちにこもりて候なりこのほかに奥ふかき事を存せば二尊の憐に外れ本願に泄候べし念佛を信ぜん人はたとひ一代の法門を能く學すとも一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無智の輩に同して智者の振舞をせずして唯た一向に念佛すべし

爲證以兩手印

淨土宗の安心起行この一紙に至極せり源空が所存此外に全く別義を存せず滅後の邪義を防んが爲に所存を記畢ぬ

建暦二年正月二十三日　源空御判

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

昔の日記

みのる生

やさしい自然の懐に素直な者でありたい。小賢しい人間の知惠と力とから脱れて、やさしい自然の愛に無心に抱かれたい。

「人は社會の子たる前に、先づ自然の子たらざるべからず。」

獨歩の人なつつこさは、その自然の懐に抱かれた所から來るのであらう。その作品は漱石よりも藤村よりも藝術的であり、純であり、餘韻があると思ふ。それも同じ所から來るのであらう。

五月六日

大正十年四月二十六日

今日は杉本さんへ行つて天香さんのお話を筆記した。「二人の女性に現れた一燈園生活の事實」といふ題であつた。十行十五字詰の原稿紙に今日は二十枚書けた。

睡眠の不足と過激な勞働、不斷の緊張とのためだらう、からだも頭も大分疲れてゐる。朝行きがけに御所の側を通ると、生々と萠えた青草に、春の午前の柔い日影がどんなに心地よげであつたか。私はその上に手足をゆるめて寢たいと切に思つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

自分の好かん人や、自分に妙に思へる人に對して「何か事情があるに違ひない」として自分をおさへるのは、自分の判斷力に制限のあることを自覺するによる。

十字架を負ふといふことは此頃少し判る。(十字架を負ふとは、死して新に生れることである。全く神樣を信ずることである。)それは一體徹底さしたらどうなるであらう。氣の附き次第一つ一つ身に行つて見たい。自分の知と力と所有と意志とから全く離れて、それに賴らないことは其の一つである。今まで關係のあつた人々はゐないもの、その人々と交渉したのとは全くちがふ世界に今は生きてゐるのだから、過去には、過去から續いて來てゐる自分には、心を使ふまいと思ふのもその一つであらう。

罪を此頃意識しだした。業といふ言葉もよく響く。

一燈園生活の强味は信仰と衣食住との解決されてゐることである。人間生活の礎の確立してゐることであると思はれる。積極的の生活は未解決であると考へる。美などの問題は全く未解決と思ふ。

私は哲學を暫く去つて信仰を求めて來てゐる。それは然し哲學の否定、知識の無能呼はりをしてゐるのではない。凡ての生活行爲(考へるといふことは行爲である)の Negative Bedingungen の確立を求めたからであつた。袋はできる。大丈夫破れない袋はできる。それに盛る葡萄酒を求めよ。文化價値、積極的生活の建設、改造はくさすべきではない。そこにこそ積極的の喜びはあるのだから。

自由であれ。自由であれ。自由であれ。少しの異臭をも氣にせよ。己が內の如何なる聲にも

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

耳を傾け、生くべき道を與へよ。
神はそのことを許し給ふ。

五月七日

午後圓山一休へ托鉢。

文化生活、即積極的生活内容の要求に驅られて、天香さんに對してひどく反抗的の心持になつて歩き出した。小田君を印刷屋の二階に訪ひ、伴うて歸る。土曜日で、新しい村の支部で會があるのだが今日はやめた。天香さんに謝りたい心、悔いの心、忘恩を自ら責める心は、夜と共にしく／＼と胸を嚙んだ。天香さんは私の師である。

「御言を敎へらるゝ人は敎ふる人と凡ての善き物を共にせよ」――ガラテヤ六章六節。

五月八日

麥藁帽が青葉の下をゆく。麥の穗が出て蛙が鳴いてゐる。穩かに暖かい晩春の星の夜である。

五月九日（膳所にて）

限りなく聖なるものよ、願はくは御心のまゝに歩ましめ給へ、善かりし今日の日を感謝致します。

魂と魂との愛、魂を信ずる者は弱い肉の躓きを宥さねばならぬ。他人（の魂）を信じないのは神を信じないことになる。神を信じなければ自分を信ずることができない。（以下次號）

○本號表紙題字　は乃木將軍の次ぎの御書の中からいたゞきました。

神州在大地之東居其陽位而面天日所發光。首受陽氣陽剛之德、人勇而兵强是天地之所生水土之所宜、固無待矯揉修飾也

瓊矛神劍諸靈綱戈莫非尙武之義矣

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

炬火を翳して

貞安操

曾ては自由と平等とを翳し、久しきに渉つて彼の侵略的軍國主義と戰つて來たアメリカも、中世を機軸に勃發した産業に只だ浮身を俏してゐた英國も、さては五十年汎獨逸主義の長夢より醒め『心靈への解放』を祈念しつゝ、雄々しくも勇ましく起つた獨逸、さては無邊の緑園に抱かれつゝ惠ぐまれたる科學を藝術をいやが上にも築き上げ世界の隅々に至る迄も、或星を撒き散らして豐かなロシヤも、等しく茲に與へられざる何物かゞ有つた。

おゝ、それこそ必然的に襲つて來る物質的文化の陷し穴であつたのである。

世界に躍動する生命の流れは其うした事實の有る無しに拘らずじん／＼と進展して往く。

其うして凡ゆる科學的發達に焦燥と困憊を極めた國々の人達にとつては、三千年來纏縷として盡きざる幽遠なる思想を湛へた東洋的思想は亦懷しいものゝ一つであらねばならぬ。其うした傾向は延いては遠くタゴールの詩藻となり或はガンヂィズムの提唱と推移して行かねばならぬのであつた。

して其の中にも幽玄微妙なる此の東洋的思潮によく東西兩洋の思想を混然相融和せしめ而も此の中にも儼とした獨自の見解を持して已まざ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

る日本の殊に一燈園生活の期せずして衆目を一齊に蒐むるに至つた事も事實の展開上必然的結果であるとも言ひ得られるのである。

斯くて爛熟の極に置かれた世界の、渾沌とした暗夜の一角に奇しくも妙なる交響樂を奏でしめた人こそ、在布實業の布哇社の主幹當山哲夫氏其の人であつた。

おゝ、其れこそ彼等永年に渉つて待ち倦むでゐた父のみ聲で無くて何であらう！ 斯くて政治家も、宗教家も、農民も、實業家も、均しく鳴を靜めて此の微妙なるハープのメロディに、ゆくりなくも限り無き天籟の妙樂を微笑を含むで恍として聞きほれてゐるのであつた。

して其の奔出した一の流露は既に師の渡航に先だつて、オールハワイ人士の一段の期待と待望を抱かしむるに至つた、各新聞社は均しく筆を揃へて師の人となりを讃へてゐるのである。殊に、英字紙ゾレチン紙の如きは托鉢着の天香師御夫妻を第一面に大きなカットとして掲げ大々的に之が宣傳に力を盡してゐる。

"Socrates of Nippon performs Takuhatsu on Board Taiyo-maru"

Atmosphere of Hawaii Charms "Ittoen" Chief.

其れは微に至り細に亘つて可成り正確に彼此の比較研究を試みてゐるのである。船中に於ける師の御消息は時々送付された、新聞や手紙に依つて手に取る樣に知る事が能きます。N紙の報道する處に依れば船中師は眞鍮磨きから便所掃除、講演、曰く何！、と矢繼早に托鉢をされた御樣子です、其うした事など讀むに付けても、其の刹那に於ける情景は確かに詩的情緒を通り越した、いや、も少し高められた或は一の神韻を傳へてゐたのであらう事を想像するに難

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

くは無いのである。

紺碧の波！、綠の蒼穹！、して其の合する處南洋の椰子の想ひを密め靜かにも輕く浮ぶひとひらの白雲に、音もなくよぎる一隻の小舟を想ふさへ、無韻の詩を無名の名書を玆に髣髴せしめ得るに、まして其の內に眞摯にして而も敬虔なる態度のある澄み切つた御姿を想ふ時誰か跪拜合掌をせないものがありませうか、或は亦船中認められた同人宛の御通信など子弟を思はるる優しきみ心の溢れ湛へられてゐる事を見逃す事は能きませぬ。同人N姉へ贈られた圖解入りの繪ハガキ

『室ははれやかな處そこを昇ると直ぐ喫烟室、出ればB甲板、上がボートの甲板、Aデッキとも言ふ、私等はCデッキの反對側の處にゐます、洗濯所は電氣仕掛、となりが無線、Cと書いて有る所は大食堂、昨夜講演した處、とてもない大きなもの也、これが規則正しく進むで往くのがおもしろいようである』—於太洋丸—

天　香

勝　淳

『立ます前いろ〳〵とおせはになりましてありがとう存じます、おかげ樣で海上無事誠にすゞしくせんたくもあまり必要がないのでよろこむで居ます御安心下さいませあなたの脚氣は如何ですか少しはよろしう御座いますか』—太洋丸にて—

勝　淳

彼地に於ける師の歡迎は大したもので海上三浬は師を迎ふるランチで偉觀を呈した相である、御上陸後の其うした事柄は亦推して知る可きである。

今大體のプログラムを記せば

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

八月十六日　家庭會員主催歡迎接見會。
八月十七日　肺病院、日本人病院、墓地訪問。
八月十八日　堀牧師招待同氏宅托鉢。
八月十八日　高橋醫師宅招待同氏宅托鉢、午後二時近藤博士夫妻の案内にてファーリントン知事訪問。
八月十九日　午後七時半より傳道記念館公開講演。
八月二十日　有志宅托鉢午後七時半ヌアヌ國際青年體育館公開講演。
八月二十一日　有志商店内托鉢午後七時半布哇佛教青年會公開講演。
八月二十二日　午後二時より桑島總領事夫妻招待。
八月二十三日より同二十九日までホノルル、及びオアフ島托鉢講演。
八月二十九日　米人主催講演。
八月三十日　汎太平洋同盟主催歡迎接見會。
八月三十一日　馬哇島へ渡島九月一日より九月五日まで同島托鉢講演。
九月六日より九月七日までラナイ島托鉢講演。
九月九日より九月十六日迄布哇島托鉢講演。
九月二十日より九月二十五日まで加哇島托鉢講演。
九月二十八日　加州ロスアンゼルス有志の招待を受けて渡米。
因に勝淳さまは主に日本人病院を中心に托鉢をされます由。

と殆んど寧日無く南船北馬日も猶足らざる有様である。此の有様を世は等しく何と觀らるゝであらうか。勉めて行くものであるか、求むる力の大なるに依るや、然らず只だ其れこそ試驗管に盛られた硝酸液に、投ぜられた一葉のリトマス紙の様なものである。物有り折に觸れて光

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

を發すとは亦這般の消息を物語るものか。不幸われ淺學にしてよく其の妙境を髣髴せしむるを得ざるを遺憾とするものなり。

殊に其間特筆すべきは御同伴勝淳様の御消息である、數年の長きに渉りて唯だ默々として專念托鉢にいそしまれたるも、世は此れに對して些の顧る所無かりしも俄然異域の地に在りて等しく世人の認むる所となりたるは彼地各新聞の並び立ちて讃嘆してゐる事實にて既に實證されてゐるものである。遙かに傳ふる處に依れば各地に於ける有志の御招待亦已み難きもの有り、旬日ならずして既に第二次ロスアンゼルスに於ける頁は切り開かれ師の靈筆は何者かを之に書き加へむとしてゐる。物質的文化の發達は其の頂點に、有ゆる制度も組織も亦た燦然見るべきもの有る彼地に如何に東洋的思想が喰込むで往くか又如何に咀嚼翫味して行くか、師の御健康を心から祈念すると共に一段の緊張と興味を持つて此れが推移を凝視してゐるものである。

座禪和讃

衆生本來佛なり、水と氷のごとくにて、水をはなれて氷なく、衆生の外に佛なし、衆生近きを知らずして、遠く求るはかなさよ、たとゑば水の中に居て、渇を叫ぶがごとくなり、長者の家の子となりて、貧里に迷ふに異ならず、六趣輪廻の因緣は、己が愚痴の闇路なり、闇路にやみぢを踏みそへて、いつか生死をはなるべき、夫れ摩訶衍の禪定は、稱歎するに餘りあり、布施や持戒の諸波羅蜜、念佛懺悔修行等、其品多き諸善行、皆この中に歸するなり、一座の功をなす人も、積みし無量の罪ほろび、惡趣いづくにありぬべき、淨土卽ち遠からず、辱くも此の法を、一たび耳にふるゝ時、讃歎隨喜する人は、福を得ること限なし、いはんや自ら回向して、直に自性を證すれば、自性卽ち無性にて、すでに戯論を離れたり、因果一如の門ひらけ、無二無三の道直し、無相の相を相として、行くも歸るも餘所ならず、無念の念を念として、謳ふも舞ふも法の聲、三昧無礙の空ひろく、四智圓明の月さえん、此の時何をか求むべき、寂滅現前するゆゑに、當處卽ち蓮華國、此の身卽ち佛なり、

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

一枚のお札

三上和志

大連に未だ居た頃、その日も他家へ托鉢によせて頂いて、夕暮、町がそろ〳〵夜店歩きの男女で賑かに成らふとする頃歸つて來ると、丁度宅では夕飯時、主人夫婦に子供樣達は御最中、

「只今歸りました。」と御挨拶する。

「お歸り、夕御飯は?」と奧樣は何時もの樣にニッコリとされる。

「ハイ、彼方で頂いて參りました。」

「然うですか。」とこん度は主人が喜んで下さる。

「手紙が來てゐましたよ。」と奧樣から手紙に葉書を頂いて、何時も私が眠らして頂く室に下りました。京都からの便り、光友からの文、讀んでゐる内に、背の方の障子がスゥと明く、

「お疲れでしたでせう。」と奧樣。

「有難うございます。この頃は他家の托鉢ばかりで………。今朝糊張りをして行つた張りぼては乾きましたかしら?」

「エ、、もうすつかり乾きまして、お蔭で好い物入れになりましたわ、鼠が嚙つて酷くなつてゐたの

で捨てやうと思ふてゐましたのに。」
「張り方が皺だらけで相すみません。」
「どうしまして、京都にゐらつしつた方は一體にはりぼての張り方はお上手ですね。」
「そうですかしら。」と口ごもりました。
暫くして奥様は、
「アノ……何時も何かで不自由なものはないかと注意してゐるのですが、手落ち勝ちでご不自由勝ちでせう。濟みません。」
「イヽエ」
「主人が申すのでございますが、妾達の不行屆きから、ご不自由になつてゐられる品を是でお整へ下さいますやうにと申しまして。」と帶の間から拾圓札を出して押しやられる。
「イヽエ、私は何不自由なく過さして頂いておりますから。」と私はそつと押し戻す。
「そうお仰らずに、兎に角一度お納め下さいまして……どうぞ。」と奥様は強くお仰る。
それではと私は兎に角一時お預りする事に致しました。一枚の原稿用紙に包んで、ヒッパリのポケットに入れました。
奥様は暫くお話をしてから、出て行かれました。
それからお札は一週間程も私のポケットには入つてゐました。私のポケットにゐる一週間そのお札は様々な事を私に話して呉れました。様々な事が、私に響いて來るのでした。

お札をお預りした日とその翌日、私はこれで何を買つたら好いのであらう。切手、葉書、原稿用紙便箋、封筒、雜記帳とよく私が使ふものを次から次へ考へて見る。と皆整つてゐる。今不足してゐると云ふものもない。不足してゐないのに無理に買ふ必要はない。買ひ置きしておくのは二重手間です。恥しい事です。矢張り十圓はそのまゝポケットの中で眠つてゐねばなりません。

ふと此那事を考へる。これさへ出せば、私のやうなものなら何でも買へる。この力で必要なもの、不足のものと云ふところは、すうと安々と通り脱ける事が出來る。然し餘り之を依賴り過ぎると、妙に不足のものだらけになる。で不足のものも整へなくなる。錢の有難みは消えて、足らない足らないになる。

錢は餘程妙なもので、使ひ方、使ふ人に依つて、その人の神々しい心の部分丈けを代表して外へ作用する。「その人の命さへ救ふ」と云はれて來る。お禮にもなる。同情の心にもなる有難いと云ふ心の露れになる。がしかし使ひ方、使ふ人に依つてその人の罪ばかりを代表もする。「いくら貸した錢でもあの慘酷な取りやう。」と云はれたりする。「とう〳〵家を飮み崩したげな。」とも云はれる。いつも錢を氣にしてゐない人、あればある丈けで有難がる人。いつも無い無いと血眼で苦面ばかりしてゐねばならない人。錢は特にこの人の側に餘けい居やうと思ふたり、早く逃げてやれと思うたりするのでもないらしい。持つ人が勝手にし乍ら、恰も錢が居たり、逃げたりするやうに見える。自分のものと思ふと

自分にのみ付ける。と足らないだらけ。自分のものとも思はないと、氣にもならない。氣にかけなければ使ひもせぬ。殘る。神へお歸しすればよりはつきりするかも知れませぬ。自分にも外の人にも。

一燈園へ來たからは樣々な錢をお預りする。殊に此方へ寄せて頂いてから實々に樣々な意味の錢を預る。樣々な意味と云へば樣々な意味でありますが、私にとつては皆な一樣な意味を持つ、ぬきさしならぬ意味を持つ活殺力あるものです。又樣々な意味に扱ふ事を賴れもする。こん度の樣に、どうぞ何なりと不便なものを整へて下さい、と云ふものもある。どうぞこれでお預り下さる子供を敎育して下さいと云ふのもある。お留守居中のものはこれでとお留守居をさして頂く事もある。これで何々を買つて來て下さい、と使ひを賴れる事もある。お家を店からすつかりお任せするから、やつて行つて下さい、とすつかり投げ出されたり、この會社をどうぞ、この財產をどうぞと、私等は手も及ばないやうな事まで賴まれる。お錢を預らされる事、その扱ひ方、その預らされ方、それ等は本統に色々な事を賴まれる。この拾圓もその賴れたものゝ一つとして私の眼には映る。又そうなくてはならない事です。全財產を預つたときでも、拾圓を預つたときでも數字と數字から計算される値には大小あつても、その根の大きさには大小はない。厭々着物欲しさや、飮食したさに惜しみ惜しみ出されたものは受取つた呉服店も飮食屋も十圓は十圓だし、百圓は百圓、ほんとうにそれ丈けのもので、その値は何處へも延びて行かないし、きち〳〵と動き左から右へ移つた丈けで眞に根は小さい、寧ろ根はなく拾

圓は拾圓で品物の動きを請足する丈けのものかも知れない。けれどもこの樣に出された拾圓、こゝに何があります、こゝに何があると重大金庫の鍵まで預けて、必要なときはどれでもお使ひ下さい、と家を園の人に預けて一ヶ月二ヶ月も旅行して來る人の何もかも任せた預け方、それなどは、只拾圓の移動、物が左から右へ移つた丈けだと云ひ切れないものがある。何かしらその動きの下に大きな根がある、而してその根に預けた人も、預かつた人も信頼し、安心し、賴依つてゐるやうに見える。その根の上に何だかしらないが、すつかり共通した心になつて了つてさへゐるやうに見えます。

額の大小にせよ財を預るたびに、私の心は樣々に行きつもどりつする。今日の拾圓にせよそうです。私が何恁うまで云つて預けられた財は、預かつてゐるにしても、友人からかりて來た本とは大分違ふ。私が何に使ふと、恐らくこゝの主人も奧樣も何とも云はれない事は明らか、謂はゞ私が勝手にして好い筈のものです。それが私の勝手にならない。何がこの財を守つてゐるのか、私の勝手にはならない。今あるが餘りにこの足袋はそこねてゐるから、一つの新しくと思ふと、それをするのに勝手にして好い筈だのにチラリとする。何處からか、洗つて縫へと云ふ聲がする。一遍位ひ一寸しつかりした便箋紙を買ふかな、と思ふと却つて一度使つた裏にするさ、と聲がする。それを何かおかし難いものを犯かして强いて買ふとすると、たゞの財とは異ふぞと響く。貰つたにしてもたゞの貰ひ方と異ふ、預つたにせよたゞの預り方と異ふと悲く。ずうと眺めると、その出どころが犯し難いおごそかなところにある。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

その財を出した人は喜び虔しやかさと共に、恰も人一人々々がぬきさしならぬ一人々々であると同樣にぬきさしならぬ一點でその財を、その人の手から私の手へ移れた。それでその財は輕はずみごころのものではない。順を追ふた、最も凉しい動き方でした。そこにハツとさせる調和があるやうです。從つて私の手から又も一つ外へ出るときも、ぬきさしならぬ順が來るまで輕擧する事は出來ない。おもむろにその財は力と光を發つてゐる。それでおかしげなあやしい私の心はその財の前に樣々に行き來する。その財を中心に私の心は樣々に祈らされる。樣々に修業する。その財を見つめてさへゐれば、どんなにでも修行も、教養も、空力も慧光も養はれる。その財さへ見つめてゐれば、私はふみはずす心配はない。私は恰もお守り札に守られてゐるやうなものです。然しうつかりしてゐるとお守り札もたゞの紙になる。確かり見つめてさへゐれば本統にお守りに守られてゐる。お守り札は私をホツと一安心さして下さると同時に、又一面嚴格に私を修行さして下さる。總じて犯し難いものです。

多くの財を手ばなしたくないために、宣光社的に、と云はれる人もありました。ホツとした形で妻を持ちたいために宣光社生活をする、と云つて一燈園の坂を下りて行く若人もありました。樣々な時に樣々な形で、一度も一燈園の人であつた人は財を持ちたくなると宣光社々々々と稱へられます。恰も宣光社と云ふ名は財を世間的に欲しくなつた一燈園にゐた人々の逃げ場でゞもあるやうに。

けれどもそう無理をしてもそれは要するに普通の「オカネ」に墮して了ふ。財が「お守り」になつて

その人の身にそつて來ないでは、財は本統に宣光社的に働きもしないし、働かせる事も出來ない。何も財には罪も由來もない。出す人と受ける人が肝心なのです。

私はかくしてその拾圓を中心にして練らされる。嚴粛な氣持になつて思はず襟を正します。とうとうその財を本尊にして私の體はお宮のやうになつて了ひます。

とう〳〵その札は私の懐から出る時がない。

ある一日、そこの主人と奥様と老人とゐられる室で、

「本統に永い間、いろ〳〵有難うございました。」とその札を出してお返へししました。

奥様はそれを見るなり、

「あら、何もお使ひにならなかつたのですか。本統に何にでも皆な使つて下されば好いですのに。」とお仰る。

「イヽエ、もうすつかりお役にたてさして頂きました。立派に「お守り」の役をして下さいました。」と心からうれしい。

奥様は少し妙な返事をする人と思はれたやうなお顔をなさる。然し苦勞人の御老人は微かにうなづいて下さる。主人は終始默つて考へられた風。（一五、八、一五、奉天にて）

亡者

松下吉衛

體よりわ心のいたでがひどかつた。再び起き上ろうにも彼れの意力だけでわどうしようもない。今わ自然のとゝのえにゆだねる外わなく、それがブラ〳〵していることのきらいな彼れに、たえがたい重荷に感せられもするが、後から後から追いかけられるような日々の可なりこみいつた働きのために、いつか忘れがちになつてしまつていた自己内心の靈の問題に、此度のことで、否應なく面とぶつかり、あまりにも薄信な自己の醜い姿に一時わ我れと驚きあきれつゝも、自ら知らずしてかぶつていた假面おはずさせられたスガ〳〵しさお、彼れわ又なくありがたいと思つた。

激動の巷からのがれきて、とうに見舞うはずになつていた病父のもとに歸つて、今日でもう一週間になる。しかし、ひどい疲勞が依然として彼れの心身おおさえつけていて、病父のみとりにも專念になれなければまた何一つ仕事に手がつかなかつた。朝など、目がさめるにわさめるが、なれない力仕事でもした翌朝のように、足腰といわず肩のあたりといわず、いゝようもなく大儀で、床がはなれずらく、幼稚園に通う子供に『とうちやん、おはよう。』と挨拶にこられて、あんまりすまなく、それでようやく枕から首おもちあげるほどであつた。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

今朝も彼れわすゝまぬ食事お、わずかにとらせてもらつた後、茶の間で新聞に目お通して東京での自分關係の社會施設その他に間違のおこつていないのに安堵の思おして、何おずるでもなく少しぼんやりしていると、玄關におとのう人の聲がきこえた。

『芳谷さんじあありませんか、どうしてこんなに早く………』

芳谷わ近村の小學校に勤めている彼れの舊友、それでこんなに早い訪問お彼れわいぶかつてこうたずねた。

『今日わ日曜ですから………』

『あゝそうでしたね………どうぞこちらえ。』

彼れわ友お書齋——といつても子供達の勉强机が三つも並んでいる三疊の部屋——に案内しながら、曜日さえ氣にとめなくなつている自分の張りのゆるみ加減に苦笑お禁じ得なかつた。

『昨日大村君に停車場で杉本さんが歸つてますつておしえられたものですから、早速やつてまいりました。』

『大村さんにわ、こちらえ歸るとき、汽車で偶然おあいしたのです。』

『そうだそうですね。』

『此度わ少しゆつくり出來ると思います。あなたにわ是非おあいしていろ〳〵きいていたとくつもりでした。』

『ずいぶんおあいしませんでしたね、………震災後おあいしましたでしようか。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

芳谷の言葉に、彼れわ震災からこつち帝都にあつて救護のことに傾けつくした自分お顧みて、いとほしさにたえない如く、

『すつかり御無沙汰しちまいました。震災後まる三年になりますね。こちらの人にわ申譯ありません。』

『あなたに歸つていたゞければありがたいが、………東京の方のお仕事の都合がおありでしようから………』

『實わ、そのことですが、此度今までにない試煉にあわされて、全くまいつてしまつたのです。……』

杉本わこういゝさして目お膝におとし暫くおしだまつたまゝでいた。芳谷わその時はじめてしみじみと杉本に見いつた。相見ざること三年、杉本の若白髪わ學生時代からなので別に意とするにわ足りないが、鬢のところまであゝわ白くわなかつた、年よりわ二つ三つ若形の彼れであつたが急にふけたものだ、髭がのびてるせいもあろう、四十男にわ確かに見えると芳谷わ思つた。

『何もかも蒔き直しです、土臺から建てかえなければならなくなつたのです。それおしに此度歸つて來ました。………最近、東京の日傭勞働者の間に無政府主義虛無主義の傾向が俄かに濃厚になつて來ましてね、私も仕事の性質上そうゆう人達にふれる場合が、自然、多いのですが、此度とゆう此度わ、實にひどい目にあわされました。お世話している勞働者宿泊所に數名の主義者が泊りこんでゴタ〳〵お起こしたのです。何しろ百人からの宿泊者が、そこにわ、いるものですから、附加雷同

されたら始末におえないことになりましようし、一番さわりのない解決おと思つて、政府の委託事業である關係から當局の指示おあおぐやら、同種の施設の方から援助お乞うやら、警察との交渉お重ねるやら、一ト月餘りにわたつて、係りの同人三四の人と共に、いゝ加減苦勞させられました。結局、金品の强要にあい、いやな折衝お重ねて退所してもらつて、小康お得られわしましたが、重大な問題が後にのこされたのです。』

こゝまで物語つてきて、杉本の面上にわ沈痛の色がにわかに加わり、吐息さえきかれた。きゝ手の芳谷も思わずかたずおのんだ。

『事件の最中に、私の對した一主義者――二十四五の青年ですが、「おれお生かせ、おれも人間である限り、みんな同樣、生きる權利がある。」とたけつて迫つてくるのです。彼れの述懷によれば、無産の家に人となり、幼少の折、大患にかゝつて不具の身となつた彼れわ、眞宗僧侶になろうと思つてその方の學校に學んだのだが、卒業してみると、眞宗の規定で、不具者わ僧籍にはいれないことがわかり、途方にくれてしまつた。それから、つくずく生活苦おなめさせられ、體驗が自分お牢乎たる唯物史觀の信奉者たらしめたが、やがて社會運動にたずさわるにいたつてからわ、常に尾行つきで、いよ〳〵就職が困難になり、生活が不安で不安でたまらないのが現在の狀態だとゆうのです。こうして、生きんとする意慾が、はゝまれ〳〵して、いらだゝしくなつている彼れの「おれお生かせ」とゆう鋭い叫びにわ、あるすごみお感じました。すべての人々が相和して生きていくことお念願としている私わ、この青年お前にしてどう祈つたらよいか。彼れわ母の愛わ信ずる、その乳

房で自分お育てゝくれた人の愛だけわ信ぜられるとゆうので、その愛お社會にまでおしひろめて考えられるよう、人間とゆうものゝ靈妙さ、その組織している社會の實相の極めて複雜な事實に眼お向けられるよう求めたのですが、社會の生活わ階級鬪爭だ、勞働者から奪つて資本家が不當に富み榮えている、そこに何の愛があるものか、自分の生活事實が何よりの證據だ、奪い返す外ない、生かされなければテロリズムまで行く、といきりたつて、こちらの言葉になど耳傾けようともしないのです。それどころか、だん〳〵昂奮して、資本主義制の害惡に對する呪咀お、そのまゝ私になげつけようとし、また宗教お資本家擁護の痲醉劑だと罵つて、一燈園なんてそんな微溫的なものわやめたがいゝと迫つてくるのにわ、私も殆んど閉口しました。徹底とゆう點からいえば唯物の一元論で言葉のすじわ通つているのですから。社會主義のことわ私も實わ學生時代からの思いのやみで、これが實現お期する以上、直接行動、流血の悲慘事まで行くであろうし、これわ自分の良心のどうしても肯定できないところであり、そうかといつて、經濟社會の實狀がこのまゝでいゝはずわなく、この矛盾にこまりはてたことが、一燈園生活に私お導いた一因であつたのですが、今の宗教的な立場で社會施設おあずかつても、こんなにゴタ〳〵お起こされて、道理わきかれず、力の備えなしにわとても管理していかれないハメに陥つたので、どうしたらいゝやら、暴力に抗する對策まで社會施設としてもたなければならないものかどうか、私わ思いあまつて遂に泣かされてしまいました。

…………こんなゴタ〳〵最中に、弱り目にたゝり目とでもいゝましようか、郷里から子供が四十度以上の發熱おして危險な症狀だから歸るように電報でいつてくるやら、つずいて父の癌腫がどうも

よくないとの知らせに接するやら、またこれと前後して敎團からはなれ行く同人が續出するやらして、晝、眞夏の日おあびてあちこち奔走して汗みどろになつた體お、夜、行きあたりばつたりのところで厄介になつておち〳〵やすむことも出來ない日がつずいたので、身も心もほんとうに疲れはてゝしまいました。子供お見舞いに歸つてほんの二三時間ばかり枕頭で看護した時、ためしに自分も計温器おはさんでみたら七度七分もありましたが、即日東京えもどつてその晩豫定の行動おとらなければなりませんでしたので、むされるような午後の汽車の中で、何おする元氣もなく、上氣したようになつて半ば夢心地で上野驛のプラットフォームにおり立つた時の思いつたらありませんでした。』

杉本の話が少しとぎれたので、芳谷わ言葉おさしはさんだ。

『ちつともそんなことゝわ知らないで、こちらでわいゝ氣で夏休おしていてすみませんでした。』

杉本わ友の好意お謝するものゝ如く心もちうなずいてまた語りつずけた。

『私わ遂に自分自身おふりむいたのです。そして、あまりにもはずかしい姿にわれながらおどろきあきれて、身動きもならぬハメにたちいたりました。信仰が、ほんとうわ、私にちつともないことに氣ずいたのです。それわ宗敎的思想の持ち合せわ、見聞きしてるので幾分ありましようが、そんなものが、死ぬ生きるとゆうせつぱずまつた問題に何になるものですか。同人のSさんが責任お感じになつて途中から此度の事件おあずかつてくださいましたが、自分の無信仰おさとり、一時お糊塗する扱えわ出來るとしても徹底した態度にでられる自信のない私わ、ただおわびして手おひく外ありませんでした。そこわ、とうに卒業してると無批評に頭の中でひとりぎめしていたことが、な

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

かく〳〵卒業ごころじやない事實が、實際問題にぶつかつて初めてさとれたのです。迂愚きわまつた話ですが。………ほんとうに、まだ安心して私にわ死ねそうもないのです。主義者におびやかされた時、子供のことが氣になつて、私わ弱い心になつてしまいました。二十六の歳の秋から今年で十幾年の間、一燈園で何の修行おしていたかとあざけられても返えす言葉一つありません。無報酬の奉仕者とゆうので、多くの場合、過分な優遇にあずかるものですから、ついい丶氣持におさまつて、自己批判お怠り、それに世話役になつたりすると煩瑣な事務におわれて、尙更、信仰のことに遠ざかりがちになり、おのずと思いあがつて我がま丶なふるまいおしてしまうのです。………おくれせばでも、此度のことから、自分のほんとのことに氣ずかされたのわ、やつぱり、ありがたいと思います。こちらえ歸る前、東京の同人が集つてくれましたので、私わ皆さんにひれ伏してこうした心持お告白さんげして、分に過ぎた世話役などやめさせていたとき、今から一新發意しんほちとして修行にいそしみたい旨、申述べたのでした。』

杉本わ、こ丶で話おきると、にわかに渇お覺えたらしく、お茶のでてないのに氣ずいて、『あ丶、お茶もくみませんで……』と、い丶ながら、茶の間の方え立つていつた。洋服の膝もくずさぬ芳谷の考えこんだ姿が、不動のま丶あとにのこつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

鹿ヶ谷より

にえ生

○八月一日晴後雨　天香師渡米京都御出發東京へ、相賀姉は東京迄、相さんは岐阜迄お供される、京都驛まで植松、藤田、其他塾より數氏見送らる。

飯田祥彦氏永らく病床にあつたが刻々に險惡濱田醫師に來診を乞ひたるも遂に十一時不歸の人となられた。何かと片付て立山、植松、宮崎諸兄、藤田等お通夜する。

○二日　松本、藤、兩姉、鈴木五郎さん、植松さん、何くれとお世話下さる、夜は、木魚さん藤岡姉通夜の爲來園。

○三日　故祥彦氏を病院に送り大學病理科研究室に最後の托鉢をされる。相、鈴木、植松、藤田諸氏同伴

○四日　火葬となし遺骨歸る夜は在園者一同故飯田氏葬式を營む、式後光の間に集ひ靜寂夜と共に語る小竹友治氏久々に來園、服部氏退園さる。

○五日　蒲團の洗濯始まる。

○九日　蒲團の洗濯御苦勞樣である、夜、中桐先生來園、お勞れも厭はず我等の爲にお話し下さる、禱堂にお泊り下さる。

○十日　中桐先生、相、鈴木、立山、末廣諸兄禱堂にて種々留守中及將來の事に對して御相談ある、即日御歸東。

○十一日　園の寵兒幾子ちやん御老母榮子さんに連れられて大連に向はれる。植松さん神戸迄送られる。

○十三日　蒲團洗濯なか〳〵おいそがしい、三原さん入園。

植松、夏井、岡本諸氏大車輪に「園便」謄寫發送。

○十五日　お盆で托鉢を休み自由休養、夜は蓄音機などで十一時頃まで賑かである。久保兄は路頭より杉本兄は久世より歸園。

○十六日晴天　今日も休まして頂く、夕食後皆さんと共に京都名物大文字燒見物歸園後光の室にて小供になつてさわぐ、西川氏來園。

○十七日晴　住山了觀さんチブス及心臟病併發、危篤の電報臺灣より來る、和代さん相さんと色々相談される。

吉田、牧島兩姉歸國さる。

○十八日晴天　夕立あり。

○十九日　了觀さん昨日午後三時死去の電報來る、一同悼む、多田稔さん九州へ御苦勞下さる、八田さんと共に禱て下さる事であらう。

○廿三日　蒲團洗濯も漸く終に近づく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

有難い事だとさつぱりした氣持で寢さして頂ける。
立山さんは男の子をおよろこびなすつたとの知らせある。
○廿五日　相、西川兩氏神戸光の友會へ托鉢吉岡姉退園同道。
○廿九日　植松、西川兩氏、大根、白菜等の播種、玉井さん入園。
○卅一日　草場御夫婦大連へ法貴さんは若狹より相馬さんは神戸より歸園夜は藤田當番兄の永らくの御世話を頂き御禮を申べく茶話會を開く。
○九月二日　久し振りの同人會を催す。相、鈴木五郎、藤田(勇)、植松、朝山、久保田、法貴、馬屋原、立山、福島、菊地諸兄、奥田、森下、藤、品川、水月諸姉及西川等にて朝の九時から午後の五時過迄、種々問題を練らしてもらつた。
新しく入園さるゝ方に對してお世話の充分でない事などから、土曜會、集團托鉢の復活も議題となる、夜は一般の集りがあり相さんから同人會の趣意及種々報告等があつた、夏井さん、中藤姉も歸園される。
○四日　午後に鹿兒島縣教育會の講習會出席の方々石神今太さん始め七十餘名來訪希望に應じ光の室で相さんから話しを聞かれた二三の方は後に殘られて研究して歸られた。
その他村上大慧さん、香園寺三密學園の方三名來訪。
五郎さんは二ケ月振りで甲東園に托鉢に立たれる。
○五日　丸山さんが横濱引上げて歸園される、御都合のあつた事だろう。
秋日和となる朝塾に行けば第一日曜でお休み五七人の同人は辨當持參郊に遊びとは邪氣のないよい感じがした、某氏から薪の御供養がある植松さん小林さんに御苦勞を願つた。
○七日　住山さんの遺骨が吉野丸に依て托送されるとの入電是れでやつと安神した、九日午後一時着との事。
○八日　佐々木さん荒川さんの再入園金澤育兒院の方が見えたお話しに依て一般社會事業の難事である事を想はされた。
○九日　故住山さんの遺骨を迎ふべく松本から來られた遺族の方々と神戸に吉野丸を待つ渡臺を送つたのも神戸の托鉢先の奥さんと私で有つた、迎へるのも當然らしく因緣付けられた樣である、吉野丸は午後一時に着く乘船して事務長さんに會へば藤川さんと云ふ青年が護て來て下さつたのでつゝがなく遺族の方々と迎へる事が出來た、直ぐ歸京、夜の七時半から六十餘名の同人と共に回向さして頂く。
○十日　永らく當番下すつた藤田勇次郎さんを朝鮮に送るべく今朝は同人一統で禪堂で御挨拶をした、即日出發。
住山さん遺族の一行は秀雄さん等と共にお骨を持て歸國される、菊地さん同道。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

新信仰の確立!! 生死問題の解決!!（直接發賣）

靈光洞主人　關 昌祐編著

最新刊

心靈學說　死後はドウなるか？

內容見本贈呈

四六形假裝　定價四十二錢送料共（郵券代用可 但シ三錢以下）

本書の大半は英國當代人氣の焦點となりつゝある心靈主義者オーウエン師が全國講演行脚の際講演せし新思想の骨子を邦譯解說せるもの、それに著者が多年研究の結果を補足せるもの。死後の問題、靈交の方法、靈學の眞髓はすべて此一冊に縮寫されてある。

◎靈學秘鍵　自己病病法（第三版出來）壹圓五十六錢送料共

發行所　兵庫縣芦屋、私書函七號　振替大阪三五一八一番　靈光洞本部

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN